

令和元年6月20日現在

機関番号：54502

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2016～2018

課題番号：16K02153

研究課題名（和文）ドイツ啓蒙主義におけるスピノザ哲学の受容と批判

研究課題名（英文）The reception and the critique of Spinoza's philosophy in the German Enlightenment

研究代表者

手代木 陽（TESHIROGI, YO）

神戸市立工業高等専門学校・その他部局等・教授

研究者番号：80212059

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 1,800,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は初期ドイツ啓蒙主義の哲学者クリスティアン・ヴォルフにおけるスピノザ哲学の批判を解明した。ヴォルフの哲学は矛盾律と充足根拠律に基づく可能性の哲学であり、現実存在は存在者の本質にその何性を規定するいかなる規定をも付加しない「可能性の補完」として位置づけられている。ヴォルフのスピノザ批判の要点は、複数の可能的世界から選ばれたこの世界の必然性は仮定的に過ぎないという、世界の因果系列の絶対的必然性の証明に対する批判にある。しかし充足根拠律の普遍妥当性を認めた点ではスピノザと本質的な差異はなく、むしろ因果性が目的性によって補われるとする点にヴォルフの独自性がある。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究は18世紀ドイツ啓蒙主義の哲学史研究である。我が国ではライプニッツやカントについては多くの研究文献が存在するが、その間のドイツ啓蒙主義の哲学に関してはライプニッツやカントの哲学の展開において副次的に研究されているに過ぎない。第一に本研究はこの分野の研究により哲学史研究の空白を埋めると同時に、スピノザ批判という視点からライプニッツやカントの哲学に対する独自性を明らかにした。第二にヤコービに始まり、ゲーテやヘルダーによって展開された汎神論論争が重視されたこれまでのドイツにおけるスピノザ主義受容史研究に対し、本研究はヴォルフと反ヴォルフ学派の論争の思想的多様性に着目し、その意義を明らかにした。

研究成果の概要（英文）：In this research I have analyzed the critique of Spinoza's philosophy by Christian Wolff, who is a philosopher in the early German Enlightenment. His Philosophy of possibility is grounded on the principle of contradiction and the principle of sufficient reason. He has positioned existence as "a complement of possibility", that doesn't add any determination to essence of beings that determine what being is. The essential of his critique of Spinoza's philosophy is that he can't prove absolute necessity of a causal series in this world, because this world is selected from among any possible world and its necessity is merely hypothetical. But there isn't any essential difference between philosophy of Wolff and Spinoza, because both of them admit universal validity of the principle of sufficient reason. Rather we find the originality of Wolff's philosophy in his representation that causality is complemented by teleology.

研究分野：西洋近世哲学

キーワード：可能性の補完 内在的様態 因果系列の絶対的必然性 目的性

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

以前の研究では矛盾律や充足根拠律に基づくドイツ啓蒙主義の哲学において、必然性に対して偶然性がどのように位置づけられるかという問題を「蓋然性」の概念を中心に考察してきた。その成果は『ドイツ啓蒙主義哲学研究 「蓋然性」概念を中心として』(2013年、ナカニシヤ出版)と題する著書として出版された。本研究ではこの問題をスピノザ哲学の受容と批判という視点から考察することを思いついた。すなわち世界の因果系列の絶対的・宿命的必然性を唱えるスピノザ哲学がドイツ啓蒙主義においてどのように受容され、どのように批判されたかを解明すれば、先の問題を別の視点から明らかにできると考えたのである。

2. 研究の目的

本研究の目的は初期ドイツ啓蒙主義哲学におけるスピノザ哲学の受容と批判の解明にある。ドイツ啓蒙主義においてスピノザ哲学は主に世界の因果系列の絶対的・宿命的必然性を唱える哲学として、神の世界創造や奇蹟、人間の意志の自由と相容れないものと解釈された。本研究はドイツ啓蒙主義において所謂「スピノザ主義」がどのように形成されたか、これに対してクリスティアン・ヴォルフを中心とするヴォルフ学派と反ヴォルフ学派もしくはピエティストが各々どのようなスタンスをとったのかを解明しつつ、その哲学的意義を明らかにすることを目的とする。

3. 研究の方法

- (1) スピノザ哲学がドイツ啓蒙主義においてどのように解釈(改釈)されたか、なぜそのような解釈が生まれたのかを、ドイツにおけるスピノザ哲学の受容史の研究書を用いて考察する。その上で1720年代のヴォルフとピエティストの論争において、スピノザ主義が両者の批判の論点に及ぼした影響を各々の著作を通して解明する。
- (2) ヴォルフの『存在論』における「可能性の補完」としての現実存在の哲学的意義について解明する。その上で『自然神学』第二部におけるスピノザ批判の内容を『存在論』の基礎概念に基づいて考察し、スピノザ自身のテキストと比較しながらその妥当性を検討する。

4. 研究成果

- (1) 本研究は初期ドイツ啓蒙主義とりわけクリスティアン・ヴォルフにおけるスピノザ哲学の受容と批判を解明した。ヴォルフの哲学は矛盾律と充足根拠律に基づく「可能性」の哲学であり、存在者(ens)は「可能なもの」としてその本質によって成立する。一方現実存在はその可能性からは導出できず、何かが付加されることで成立するがゆえに「可能性の補完」と称される。ヴォルフによれば現実に存在する事物は個体であるが、個体は可能的世界において汎通的に規定されており、現実存在は存在者の本質にその何性を規定するいかなる規定をも付加することのない特殊な「様態」である。ヴォルフは現実存在を概念規定における付加を含まない「内在の様態」と見なしたドゥンス・スコトゥスの思想を受け継いでおり、現実存在を可能性に何らかの規定を加える「補充」ではなくたんなる「補完」と称したのもこうした事情を踏まえていたためと考えられる。
- (2) ヴォルフのスピノザ批判の特徴は、第一に当時の通俗的なスピノザ解釈には従わず、スピノザ自身のテキストに基づいた批判をしたことにある。たとえばスピノザは世界の因果系列の絶対的・宿命的必然性を唱える無神論者であるという解釈に対しては、スピノザは人間の自由意志を否定する「普遍的宿命論者」であるものの、「神が存在しないことから靈魂が自由でないことは帰結しない」(『自然神学』第二部456節)として、無神論と普遍的宿命論は必ずしも一致しないことを唱えている。これに対しスピノザ哲学は普遍的宿命論と分かちがたく結びついており、「ある意味では無神論より有害」(同716節)なのである。
- (3) ヴォルフのスピノザ批判の特徴は、第二に『存在論』で展開される基礎概念の定義に基づいていることにある。ヴォルフは『存在論』において伝統的なスコラ哲学の基礎概念を継承し、これを明瞭化することに努めている。ヴォルフはスピノザの体系の本質的な欠陥がその基礎概念にあり、その用語法が伝統的な用語法から逸脱していることにあると見なしている。たとえばスピノザは『エチカ』第一部定義4で属性を「知性が実体についてその本質を構成する(constituere)ものとして認識するもの」と定義する。実体とは「それ自身において存在し、それ自身によって考えられるもの」(定義3)のことであるので、「実体の各々の属性もそれ自身によって考えられなければならない」(定理10)ことになる。しかし「それ自身によって考えられているもの」とは、その認識が他のあるものの認識を必要としないものである。それはヴォルフの用語法に従えば「それがなぜ内在するのかといういかなる根拠もあたえられないが、そのものについて考えられている第一のもの」(『自然神学』第二部679節)のことである。ところで存在者について考えられている第一のものとは本質であり、「本質構成要素」(essentialia)あるいは「本質的規定」(determinatio essentialis)がなぜ内在するのかという根拠もあたえられないのであるから、「スピノザは属性を本質的規定と混同している」(同)のである。
- (4) ヴォルフのスピノザ批判の要点は、実体の唯一性の証明と、因果系列の絶対的必然性の証明に対する批判にある。前者は、唯一性の根拠となる「同じ本性あるいは属性を持つ二つあ

るいは複数の実体はあたえられない」という『エチカ』第一部の定理5をスピノザが証明していないという批判である。しかし定理5は一つの属性のみを持つ実体が複数存在するという仮定の下に立てられた定理に他ならず、実体の唯一性の証明に必要なのは「二つの実体はどれほど多くの属性を持つとも、同じ属性を持つことができない」ことの制限なき妥当性なのである。また後者は、神の本性から必然的に生じるのは「可能なもの」の本質であり、複数の可能的世界から選ばれたこの世界の因果系列の必然性は仮定的に過ぎないという批判である。しかし充足根拠律の普遍妥当性を前提している点でヴォルフとスピノザの間に本質的な差異はなく、むしろ事物の因果性が目的性によって補われるとする点にヴォルフの独自性があると考えられる。かかる点においてヴォルフのスピノザ批判の妥当性にはなお議論の余地があるものの、ヴォルフのスピノザ理解がその後のドイツのスピノザ受容の基盤になったことは相違ないのである。

(5) この他の成果として酒井潔他編『ドイツ哲学・思想事典』(ミネルヴァ書房、2020年刊行予定)の「ヴァイゲル」の項目を担当したことを付記する。ヴァイゲル(Erhard Weigel 1625-1699)は17世紀ドイツの数学者。天文学者、建築家、発明家、教育者でもあり、プーフエンドルフやライプニッツの師としても知られる。アリストテレスの哲学を継承したが、思弁的なスコラ哲学を批判し、ユークリッド幾何学を模範とする数学こそが「普遍学」(Scientia generalis)としてあらゆる学知を可能にする唯一の学であると考えた。「計算する」(Rechnen)能力こそ動物から区別される人間の本質であり、算術の方法を他の学問分野へと拡大し、神学の確固たる土台とさえ見なしたため、イェナ大学では許可なく他の分野を講じることを禁じられ、数学の教授に専念することを要求された。事物相互の實在的因果関係を否定し、反復された一が事物の存在の各瞬間であり、その各瞬間において新たに被造物を無から創造する神の作用のみを認める機会因説の立場に立った。人間のハビトゥスをも神の直接的な作用に還元したため、その自由は内的な自己決定に制限された。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計 1件)

手代木陽「ヴォルフにおける「可能性の補完」としての現実存在」、『ライプニッツ研究』、査読有、第5号、2018年、pp.180-199.

〔学会発表〕(計 3件)

手代木陽「ヴォルフにおける「可能性の補完」としての現実存在」、カント研究会第307回例会、2017年3月11日、京都文化センター

手代木陽「ヴォルフにおける「可能性の補完」としての現実存在」、日本ライプニッツ協会第9回学会、2017年11月19日、学習院大学

手代木陽「『自然神学』におけるヴォルフのスピノザ批判」、第29回一橋哲学フォーラム/第8回スピノザ・コネクション(招待講演)、2019年3月15日、一橋大学

〔図書〕(計 0件)

〔産業財産権〕

出願状況(計 0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年：
国内外の別：

取得状況(計 0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究分担者

研究分担者氏名：

ローマ字氏名：

所属研究機関名：

部局名：

職名：

研究者番号（8桁）：

(2) 研究協力者

研究協力者氏名：

ローマ字氏名：

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。